武德成業

七

内閣文庫
番號 和 15251
冊數 63（7）
函號 150 12

内閣文庫
和書 類
一五二五一 號
六三 冊
五〇 函
四 架

武德成業巻之七

伯耆守加藤正倫編

武德大成

元龜元年庚午（皇朝ハ正親町院 武家ハ灵陽院義昭）春正月　神君濱松ノ城ヲ築セラル湟壁堅固ニメ殿樓華麗ナリ視ル人皆闗東第一ノ壮観ナリト云去年正月ヨリ見付ニ城ヲ築セシカ城郭町割マテナリテ諸士ノ居宅ノ地定リケレ𪜈地形ヨカラサル所ナリトテ濱松ニ移サレケル　三郎信康君ヲ岡崎ノ城ニ居住セシメ玉ヒ　神君ハ濱松ノ新城ニ御座シケリ

武功實録

權現様濱松ニ御座マス時最初ニ来テ向後可得御差圖ト申

日本政府図書
内閣文庫
浅草文庫

候大名ハ最上氏也依之後ニ御加増大分被下候且被進候御
書ニ隣國ノ儀ナリ向後可被御通候其印ニトテ正宗ノ御脇
差八寸五分有之ヲ被下元来守ノ津ノ国宗ナルヲ後ニ國ノ字ヲ正ノ字ニ御書面ヲ改タルノ沙汰有之ト云々最上
氏改易ノ後右ノ御書并脇差賣物ニ出タルヲ水谷伊勢守殿
ヘ金百枚ニ被買之ト云
家忠日記
廿一日今川氏真カ臣小原肥前守カ男三浦右衛門佐山西花
澤ノ城ヲ守ル信玄謀テ是ヲ招クト云ヘ圧小原父子忠義ヲ
守テ信玄ニ従ハス城ヲ弥固ク守リ信玄軍ヲ発メ城ヲ囲マ
ハ是ト防キ戦テ雌雄ヲ決セント欲ス是ニ依テ信玄兵ヲ花

澤ノ城ニ発ス案内者タルニ因テ岡部二郎右衛門尉正綱ヲ
以テ先隊トメ城ヲ囲テ攻撃守将小原カ甥小原源之丞同姓
權右衛門尉及ヒ井伊弥五郎杦原豊三郎等城中ヨリ出張メ
奮戦フト云ヘ圧甲兵ノ多勢進テ競ヒ攻ルノ間遂ニ花澤ノ
城陥ル今川家ノ同朋伊丹權阿弥屢城中ヨリ進テ寄手ノ兵
ヲ追退ケ勇ヲ奮フ信玄渠カ武勇ヲ感ス花澤ノ城落去ノ後權阿弥ヲ初テ従者トシ後ニ伊丹大隅守ト号メ海賊ノ長トス
小原肥前守父子花澤ノ城ヲ出奔メ遠州高天神ノ城ニ
遁去ル高天神ノ城主小笠原與八郎ハ連年小原ト交好ノ友
也是ニ依テ小原妻子ヲ携ヘ高天神ノ城ニ往テ小笠原與八

郎ニ因テ　大神君ノ麾下ニ屬センヿヲ請フ與八郎謀テ小原父子ヲ殺シ其首ヲ　大神君ニ献ス大神君ト氏真不快ノコト小原父子カ所為ナルノ由大神君渠ヲ惡ミ玉フ與八郎兼テ是ヲ聞ニ依テ小笠原父子ヲ殺サハ大神君ノ御旨ニ応セント思慮メ旧友ノ信ヲ變シテ遂ニ小原父子ヲ殺ス　然リト云𪜈大神君小笠原カ朋友ノ交ヲ棄テ是ヲ殺スヿ甚情ナキノ由大神君命有テ是ヲ悦ヒ玉ハス今川氏真駿府ノ城ヲ守ラシムル家臣ラカ逆意ニ因テ府ノ城ヲ再ヒ信玄ニ奪ヒ取レ僅ニ免レテ相州小田原ニ至テ北條氏康ニ因テ蟄居ス氏康是ヲ憐相州早川ニ新ニ宅地ヲ修メ氏真ヲメ是ニ居ラシム世人氏真ヲ呼テ早川ト云

岩淵夜話

織田信長公より江州小谷城主浅井備前守殿ハ其前の舅近き縁者ニ候得とも後々ハ我等ニ對し必定仇を仕るへき者と兼而存候只今其内ニ切腹いたし候様ニ可被成候唯今其内ニ兼て左様ニ思召候ハヽ御下知ニ候ハヽ万一御出馬を被成候ハヽ可申可有との使者之　家康公大神君御返答を被仰され追付氏方々酒井左衛門尉本多百助を使者ニ被仰遣され候ニ付浅井成敗いたし候上ハ後々の儀ハ御断可申候後思案致し見申候處若御国成敗もなく候ハヽ小谷ヘ御出勢可有候今少し御見合可被成候其内浅井ハ別心ニ候由何方ニ有へく候とも行く不便の仕方諸人の目ニ余り候上ハ彼祖候先代ハ後ニハ當小笠原殿両方ニ付屋候被仰付加勢ニ被成

に御越候ても　家康も御見廻に可被参候との御沙汰有けり
信長公御返答には浅井事御心のまゝ被成候に付ての御事に候へは御先
御手に添人の目に立程の御勢もなく候とも先へ御越有度由御念入候て
御満足なされ候との儀也

柏崎物語
永禄十三年元亀と改元　神君ハ去年遠州掛川今川を御攻候ゆへに
付当春上方へ御上り御出陣尾張国府次郎宅へ御旅館信長ハ半井卜養宅
に居られ京都を初て御見物将軍家より能を催され　神君信長
御供有之後信長越前朝倉を攻られ候得は御身を驚付召所之事
にて先年浅井を縁者に被成置候ゆへ浅井も御先へ参まじと家老共申しや私共縁者ゆへ
ましくハ申難し
然ハ義昭将軍へも忠節を存し胡蝶同盟なれハ将軍家にも忠節に自らも向て
攻掛しと存候を浅井ハ御味方成何にしも案内も不及と信長
之事　神君をとも同敵之事　徳川織田両家出て攻る
故に勝しとの為浅井合点せさる内切に有る

武徳大成
同年二月信長浅井朝倉ヲ攻ントテ近江越前ヘ出陣アリサ
レ𪜈敵ノ人数強ク要害ヨケレハ信長モ危ク思ハレケルニ
ヤ　神君ヘ加勢ヲ乞レケル　神君先岐阜ヘ御出
有ケルニ信長大ニ悦レテ参州遠州ノ平ラキタルヲ労セラ

ル援兵ノ事約束アリテ　神君岡崎ニ皈リ玉フ三月七
日　神君三州遠州ノ兵ヲ卒メ岡崎ヲ出軍シ玉フ信長
モ先ツテ大軍ヲ卒テ江州ヘ出陣セラル浅井下野守久政備
前守長政父子元ヨリ信長ト和睦ニテ約アレハ戦モナク江
州ヲ越テ直ニ越前ニ入ケル夏四月廿日　神君若州ヲ
過テ熊川ニ陣シ玉フ

柏崎物語
信長は人数十万餘　神君は僅人数五千余にて御人数共越前迄
働きて浅井へ申遣浅井勢を以て陣は血もかハく故に左様は後ろ原
子方より矢は上申し一手引ハ不叶と申し止り申事胡乱にて持仕

信長を可討と浅井遠藤（朱）中八を達て信長を討取候中に候た心得
なし今ハ如何様にも信長へ身を寄て能と申しいや只様に成まし候也
こゝは不似合之気角胡乱にて如何様にも家を立る様ニ可致と申されし
是非なし

家忠日記
四月廿日織田信長兵ヲ越前國ニ発ス近江路ヨリ若州ヲ経
テ熊川ニ至リ松宮玄蕃允カ館ニ宿ス廿三日信長佐柿ニ至
テ栗屋越中守カ宅ニ宿ス廿五日信長越前国敦賀ヲ出テ進
テ手筒山ノ城ヲ攻ム柴田修理亮勝家木下藤吉郎秀吉池田
勝三郎信輝等城ヲ囲ンテ攻撃　大神君信長ヲ援玉ハ

ンカ為師ヲ帥テ来會シ玉フ　大神君信長ノ兵ヲ率テ
競ヒ掛テ奮討手筒山ノ城遂ニ陥ル　大神君及ヒ信長
ノ兵士ラ首ヲ得ル了千三百七十余級
（武徳大成）廿六日淺倉中務大輔カ籠ル金ケ崎ノ城ヲ囲ム朝倉中務僧
二人ヲメ信長ノ許ヘ遣シ偽テ云様ハ某城ヲ率テ公ノ旗下
ニ従ヒ此國ノ案内ヲセントト云ケル是ハ信長ヲ嶮岨ノ地エ
引入テ浅井ト兵ヲ合テ撃ントノ謀也然ヲ信長誠ト思ヒ悦
テ申サレケルハ中務降参セハ我越前ヲ平ケン了難カラス
先兵ヲ分テ若州エ遣シ武藤上野介カ質ヲ入テ治ムヘシト

テ丹羽五郎左衛門長秀明智十兵衛光秀ヲ若州ヘ赴カシム
信長ハ先陣ヲ金寄ヘ進メラル時ニ江州ヨリ早飛脚来テ浅
井長政約ヲ變シテ朝倉ト心ヲ合スル由告ケレハ信長大ニ
驚入テ木下藤吉ヲ金崎ノ敵ノ押トメ夜中ニ軍ヲ引テ京ヘ
皈ラル諸将皆信長ノ京ヘ皈ラル、ト聞テ吾先ニト皈ケル
神君諸軍ノ躁キヲ見玉ヒ軍ヲ引テ退キ玉フニ敵兵海陸ニ
充満シテ路ヲサヘキリケレハ　神君自ラ鉄炮ヲ放シ
防キ玉ヒ内藤四郎左衛門正成頻リニ矢ヲ放ツ渡辺半藏守
綱モ此路ニテ味方ヲ敵ノ追ケレハ引返シ敵ヲ追退ク然ル

故ニ敵ニケ去ケレハ追討ニシテ首二三百討取ケリ味方一
万余騎ハ何事ナク江州朽木迫引取玉フ丹羽明智若州路ヲ
皈リケルニ敵ニ支ヘラレ危カリケルヲ聞召テ兵ヲ分テ救
ヒ玉ヒケレハ両将モ恙カナク朽木迫引退ク是ヨリ今津舟
木ナト云所マテ浅井方ヨリ鉄炮ヲ打懸ケレトモ備ヲ乱サス
京ヘ引退キ玉フ秀吉悦テ　神君ノ援兵故ニ無事ニ引
取タルトテ謝セラル信長モ　神君ノ忠義アル働ヲ感
セラレテ厚ク謝ヲ述ラル
家忠日記
晦日信長朽木越ヲ経テ入洛ス

五月九日信長暇ヲ義昭ニ告テ出京シ則江州ニ至リ森可成
ヲシテ志賀宇佐ノ両城ヲ守ラシメ佐久間信盛ヲシテ長原ノ城
ヲ守ラシメ柴田勝家ヲシテ長光寺ヲ守ラシメ中川八郎右衛
門尉ヲシテ安土ヲ守ラシメ木下藤吉郎ヲシテ長濵ヲ守ラシテ
岐阜ニ皈ラント欲ス佐々木カ残黨鯰江ノ城ヲ守テ通路ヲ
塞ク蒲生右兵衛大夫等ヲシテ郷導トシテ信長千草越ニ赴ク
柏崎物語
信長十万余の人数を三手にわけ金勝を攻る此人数も攻る信長はまた一手は
進ミ不知せしか落手つゝく茅山田も攻破る金勝并瀬沢ハ秀吉木下
藤吉郎信長より城中へ使を送て右衛門して一味不参討死せる

こゝに越前の先陣城を出て追へし寄手送りとても指揮へ離しとて
廿六日に夜明渡まて木下藤吉郎殿人数わつか後陣前尾より城をとらす
浅井方に成朽木へ一味して近江路を押塞ぐ信長は人数さへなく
信長松永弾正を以て朽木を頼み大軍にて云をも不可攻と思ひ信長前
無別と云道節に案内を能く知りけれは右有へ〆御帰京松永に承
を攻破られけるを御勝に成城へ一先人数引入可然と申城を出は大敵に
城中次へ浅井より使者 三河衆合せて清水に 信長の
鉄砲を返す多年朽木しかし今又大敵に城を取へ依て手切
以てすと申使者にさて落へ帰てさらば信長は松永へ御後の御一段

浅井近江路を取切り引返して　権現様御引取被成御目通
馬上より鉄炮打払被成殿は其外廿騎を働く三日申く敵六人討取
す是に驚き一揆ども引払ふ其日浦と云所へ御出高宮舟を御借アサ
ツマ浦へ御出被成此の人々河田弥三郎へ御出被成勢田へ御出京都へ御出
被成信長も京都へ御帰候て御礼申上　此度御難儀浅井故に候へ
浅井を御討被成候人数を催し御出陣被成候様に御申　右月
七日より御出馬　御帰城被成
信長も九日御出馬岐阜へ御帰り同月十九日の晩に御出馬浅井を可討
手筒山に付被仰出候は寅に御発し木目峠一揆を催し出る

先ニ信長ニ討破られたる者とも之御ニ不し申もの候て打破ける處も在之
く叡山を被遊候ニ付衆徒共ゼンジウ坊と云ふもの一揆ニ加候て
居候二玉を込打候處五月廿日ニ暑く信長公肌ニ帷子計着候て馬上
ニ而行候處を被成候處を打違ひて両袖を打抜く大勇之人ニて無恙
被成候事ニて候

信長朝倉を攻浅井ニ組し門跡とて討死と云も不能事と云ふ
本願寺様御門跡の御説ニ依れて被成候て其人御残し御払ひ
御ら之様もてなし候者有之大事ニ門跡居候御下蔵事ニ
残る人々也と云信長甚腹立ち給ひ其も参る人数を路ニ出て待たせ信長

御門跡ニ付門跡廿八日　神君御門ニ被成候若衆ニ御出候
鉄炮七百挺余取集め二手ニ分而御陣の道筋指を切り塀切をあける所ニ
土民起り鉄炮を打出候ニ付被成難儀被遊候

落穂集

右今ケ條之説より信長公門跡御陣之儀ニ付一説有之候成附
家康公信長公へ御見舞として御対面之節老人出座致しける人
と御説ニ被成思召候ニ付御座候御事信長公之御中ニ八
末御好有之候ニ付御の仁と松永弾正と申て世上の人の致し難き事
を三度迄致したる仁ニて候其一ツは主人三好ニ逆心をすゝめ公方
光源院殿を攻殺させ候事其後又逆意を企主人三好の家を

亡し其後南都の大佛殿を焼失ひけるに付てなりけり松永大弼
京向いたし逆意者と稱せし者を　家康公御止りに思召御座を
御立之節松永ヵ侍従して御居室に参りしかれ是を為る及ひれ此由を
申上候處御国ニ於て天下を取へき所に向後を心得可申
旨仰らし御挨拶被仰せ候ゆる御膳飯へ御備へ被下御用に候有之し
御取立在御前へ罷出候ゆる右ノ次第を御咄し被仰れ信長は御前の
事も御候こそ是ハ松永ヵ科と御難儀いたしける所を御覧ニ被仰付
大和國御難儀被仰れけるに御前は上洛に御所を今年信長金ヵ
崎表を引退せし時浅井ヵ謀り仕事を以て不図も方々に一揆起り候

相成り信長も難儀致されけり朽木谷へかゝりて引退その安候に被成
朽木谷ハ元ゟ朽木一家の城なれハ浅井と一味の段難計と有之処
松永進出て信長へ申上けるハ我等義朽木ヵ館へ罷越ヘ只今謀て
朽木を御味方に引付申へし朽木同人儀我等と懇意ニ候ヘハ利説へ人をあずけせ候を
安堵し御返事ニ可有之此旨無事ニ御内合御定め是ニ於て若我ヵ申達候事
難くハ松永儀朽木と共に遣へ相果べく思召候方へ御申上候得共
ヵ話しと存候て朽木方へ御引説人を出させて是を成る共に
附信長殿を案じて朽木谷へ入られけり若此儀実正ニてはいたし
御師をも来り御猶を無御座候と無難を古き書物の内にも見當り

五月ニ雨元亀元年大飢饉候處ニ大野知心我等ニ[illegible]渡也

家忠日記

六月四日浅井備前守長政江北長井苅安両所ニ要害ヲ搆ヘテ信長ヲ叛十九日信長兵ヲ率メ浅井郡ニ進発メ長井苅安両城ヲ抜ク

廿一日信長兵ヲ進メテ浅井長政カ城小谷ニ至ルトイヘ𪜈佐久間信盛カ諫ニ因テ城ヲ攻ル事ヲ止メテ軍ヲ退ケレト欲ス

廿二日信長軍ヲ返ス時浅井カ兵是ヲ追フ信長ノ軍士能防クニ因テ敵遂ニ退去ル

信長軍ヲ発メ横山ノ城ヲ攻ム守将浅井カ家人大野木土佐守三田村左衛門尉野村肥後守徹勢タルニ因テ援兵ヲ浅井ニ乞フ浅井亦使ヲ越前ニ発メ朝倉義景ニ後援ヲ乞義景是ヲ諾メ朝倉孫三郎ニ一万余騎ノ兵ヲ加ヘテ横山ノ城ニ赴カシム

柏嵜物語

南横山ハ東ハ伊吹山西ハ[illegible]山其間より姉川流出る伊吹より山續小谷の方小谷山ニ小城有小谷城と云大谷山其東の方大嵩山有小谷山の向ハソンセウ寺山雲雀山其西ハ小虎[illegible]山横須[illegible]山ハ姉川[illegible]境[illegible]弐拾六町高岳[illegible]山

六月十九日廿日廿一日二日に信長数万の人数を出され越前海道を押通し
候横山より所々出陣ニ而押を立返り出る事に及信長ハ虎御前
山へ上ル浅井ハ虎御前ハ城より西南の方を信長勢に小競合候て虎
御前山へ上り浅井ツンセウ寺口雲雀口へ人数を向けて虎御前を要害
又姉川を越へ向ふの岸ノ鼻へ上ル浅井ハ城より西南の方にて虎御
前の岸ノ鼻へ下り引掛候浅井父子を本出ヨウノ若狭出る若狭守
浅井方出て信長の跡を喰留る廿二日ニアツミ虎九郎子田宋女大ニ戦ハ
佐内蔵助ハ高き所に乗り取らして居る宛おハヤナダと號ハヤナダニ引掛て行二番ニ
佐々誠之信長の旗本ニ内蔵助ヨリ先手働て内蔵助一番鑓を入ル二番ニ中條将監

打て出る若狭人数を追立引んとす所若狭又追返し将監追立
られ信長先を乃柴田か横を打て入る時に鉄炮にて打つ所ヘヨウノ
討負引信長も難儀の場にて人数を引掛し岸ノ鼻へ上り
翌廿二日　権現様も御出に成途中にて御対面なされ浅井人
数あまた之　権現様を御具して信長も是に難儀に成
爲羽蝶の紋不之是信長の紋中に平家の紋之今に織田家
先を打る
横山の城を落し其後　権現様と御沙汰押を立至江州
二月日に信長次中胡余にて加勢の事しまる内にて攻取る

申ノ刻ニ至リ廿六日大寄山ヘ朝倉より加勢一萬来る朝倉孫三郎景健
信長聞召シ大寄山ニ於テ加勢ノ人数一万今夜明日乃兵粮支度の
明リを見付今夜人数を出シ朝込ニ寄る支度と合点して
おく　権現様ヘ御出馬被成候様ニ被仰上

岩淵夜話

元亀元年庚午六月廿七日江州姉川合戦於テ此日
家康公信長への御加勢ニ軍ニは二の手ニて勝利有之の由ニて
ニ三郎池田紀伊守御一座ニ居られ先を取られ候事ニ付二の
手近ハ越させ申しとの事ニて此度ハ先をいたし吉を申上ル　家康公
仰られ候ハ危様ニて有之候事ニ付何とそ御挨拶

出て、さて今度信長公へ仰られ候ハ明日の合戦ニ於てハ浅井朝倉
何れニても一方を我等ニ被仰渡候へハ切崩して御目ニかけ可申と
仰られ候信長聞召し浅井ハ我等ニ当敵ニて有之朝倉を御頼み候
中度く候左候ハゝ兼て朝倉へハ人数余多人数ともを唯今[illegible]
御目ニ及ハゝ何分御見合何分ニも御下知次第ニ[illegible]
候ハゝ様子急度申付へくと仰　家康公出シ合戦ニ
小勢なれハ[illegible]ニ少人数を差引付て大勢ハ我等ニ可被成候と上
人も[illegible]御旗本中ニて申合せ次第朝倉人数ハ何程ニ候へ
不苦家康ニ加勢并ニて一戦を遂候へしと仰られ信長公被仰候

申さは此場先を衛に於ては此日前はいさゝか心なく家へ此頃も
我にを世上にて悪度の事をせめて八二陣も三陣を御用になくして
不連ら重き此様に仕候と云仰　家康公聞し召て先様に思召
候旨にハ誰にても一陣を御付此様にと云信長公誰ぞ可遣
と宣之をは　家康公御申に此方之儀は稲葉伊豫守可然と
仰らる

落穂集
家康公ハ加勢として越前之間に其身に千余の人数を召連られ
濱松を御出馬被成六月廿六日信長の陣へ御出会時廿七日信長の
御前にて軍評定ありて柴田明智ヶ其外ニ一陣とし

家康公申は二陣に御備へ一つ先旨と云事ニ而　家康公仰
には我も此柴田明智々二陣には在か様にして出勢致し申す
甲斐も候はし浅井朝倉か歌成中に而て何共成候者共に請取て
切崩し此国に重き事にて候へは信長公さへ仰候にいたしては
浅井殿て我にも尚御申す歌也事に此様も其前の様にも成く
切崩し事に此方ニ候と云へは朝倉ハ此向ふの知に阻む者は
小勢にて此方様の朝倉殿を多勢の中おゐて此方大身の人数
打の中にて三四人も御手の事同前にても此方中此様に其の
儀之　家康公御申被成我にも勢并にて事済此場

是非に於ては可有之との儀に候得共稿案に一決として御出馬有間敷候ニ
一人御帰に加り候ニ一決御陣営に参上して申候は先つ当座一戦
の利を得は扨何用は御用にも相立申間敷候右御先手衆之中
ニ而金ニ而も申渡し候得共之　家康公ニ而は申上越候
む也は先つ大事之所にも存候及候而胡金多勢我等ニ候ハ小勢の儀
なれハ御備ニ而候の事二ツニ成候様ニ二陣ニ而我等の
一戦急と申候及而候ニ相構候横鑓ニ突懸て胡金勢を切崩
されも候得共其上之に候得ハ一決之御旗本陣なり

信長公并池後入居ニ申付人数ニ書付を以而書出之　権現様

御出御覧之上被成二の見ニ被成御出座候て御本同心ニ而別て胡金方
浅井へ御向候様ニ被仰候得而御信長公被仰胡金へ御向候様ニ被仰候得共
加勢を可申上と申候ハいやさ人も御用無之様ニ仰候信長は是非人数
を指出し候へと御好被成御附申候而申候ニ付而稲葉伊豫守を以
江州之人数を指出し候内の主れ方急も角も候て伊豫守を始之衆方ハ
弓矢ニ罷成候之　徳川殿御好ニ而出陣申候御働けと申
権現様思召之内日の御働能武士を御撰ニ罷成候而之衆之御心ニて
今日を御覧被成候ハ思召ニ而ハ之候所ニ付稲葉ニも大ニ働き申候
所は姉川信長陣を一筋指之申候ニ浅井西八郎方胡へ先の根ニ而候

当家におゐては　権現様よりは源家の遠上にて至り候御由緒を
御用ひ被遊候へは御武名を弥輝き候御利運は御初軍之
大河内家之義を深く想ひ申上　武士たる者ハ之を能く心得へしとか
権現様被仰しに御悦ひ被遊候よし
竹中久作半兵衛重治之右久作に語りては大軍有りし時左右前後を
うけ候と云人て先し久作に申出し軍ハ此如く別て人数之能見知て
居る候てこの時取及手出の軍ハ左右前後へつさしにと仰候へ当て働く
事を好む者也此如く知れ候軍を知くいる処にあらすと云たる
して相手自ら左右前後へを討れ。

神君下知シ玉ヒテ酒井左衛門尉忠次水野惣兵衛忠重ヲ先陣タラシム東三河ノ兵是ニ従フ松平甚太郎家忠松平主殿助伊忠松井左近忠次小笠原與八郎長忠大須賀五郎左衛門康高等二千余騎一備ト〆是次タリ中軍ニハ　神君自ラ兵ヲ率ヒ玉ヒ榊原小平太康政本多豊後守廣孝左右ヲ囲ム後陣ニハ稲葉一鉄備ヘタリ都合六千余騎ナリ信長ノ陣ハ坂井右近政尚先陣タリ池田勝三郎信輝木下藤吉郎秀吉其次タリ信長ノ旗本マテ拾三備ナリ軍評定ノ時坂井池田木下先陣ヲ争フ信長申サレケルハ秀吉ハ江北ニ領所アレ

ハ下人等皆江州ノ者ナラン然ラハ士卒常ニ淺井カ威勢ヲ
恐ルヘシ戦ヒ利ナカラン故ニ坂井先陣タリ卅羽五郎左衛
門長秀ハ横山ノ城ニ備フ

明良洪範

時ニ忠勝忠言ス信長公ヲハ無二ノ味方ト思召レマシク候
折モ有ハ　殿ニハ討死モ在ス様ニトエミ玉フヿ無疑
此度ノ御出陣殊ニ大事ニ候ト申上ル　神君殊ニ悦ヒ
玉フトノ御事ニテ境目其外御人數ヲ態ト殘シ三千余騎ニ
テ御出陣勇敢金鉄ノ集取故朝倉カ一万余騎ヲ切崩シ玉フ

柏崎物語

廿七日淺井孫三郎京勢を迎ひ戦を乞て云信ハ不敵者今夜中ニ
引胡辺ニ不意を討んと云浅井ゆ答云夫ハ宜ゝ御座候　信長ハ歌の
道ニて其上荒猿目候を知り名将ならハ川ひ難しと申候夜ニ入足軽
共右ハ不意ニて可答と申　廿七日右衆右ハ其見ニ付て胡辺ニ押寄る
支度あるとなり
廿七日夜中ニ浅井相か人数を姉川端へ出しける川を越候て
信長も夜中ニ川端へ人数を出ス　権現様ニも川端へ御人数
御出しなされ浅井方百丁二町程本陣を立て騎馬すゝる出羽
平八郎を先を立んて横を打れ様りと相見へ候とも是ニて先を残
ゝり討と進候ニ而　権現様御人数川を越え虎口好与

感状記
近江ノ姉川合戦ニ朝倉ハ浅井ヲ助ク　源君ハ信長ヲ救ヒ玉フ　神君ノ先手榊原小平太康政酒井左衛門尉忠次信長ノ旗元ニ使ヲ立テ戦場ノ地利アラス候左ノ方ニ廻ルニ便リ有トテ田間ノ細道ヲ行ニ信長十騎計ニテ乗来リ敵ヲ前ニ置ナカラ物語ノコトク細道ヲ並行ハ何事ソト怒ラレケレハ酒井カ家人石原寸度右衛門ト云者アリ未戦サル前ニ泥田ニ入シヿ何ノ益カ候ハン信長ノ先手ハ家康也　家康ノ先手ハ酒井也酒井カ先手ハ不肖ナレ𪜈此寸度也只先手ニ可被任セトテ耳ニモ聞入ス戦ニ及テ敵酒井カ横合ニ進ヲ見テ人衆ヲ立直ス處ニ榊原田ノ中ヲ一文字ニ切テ懸ル敵又此ニ立合ントス酒井大ニ呼テ衆ヲ諫メ兵ヲ縦チ撃テ朝倉ヲ破ル

古人物語
大藏道知姉川合戦ノ刻カキノ帷子ニ縄帯ヲメ編笠ニテ魚ヲ川端ニ釣テ居タルカ俄ニ取合戦ヒ敵ノ捨タル鎗ヲ取テ合ス見事成体ト也信長公米ヲツクヿ數寄也釆着サシテ浴衣ニテ俄ノ取合ニ仕合ス是又見事成ト也武者ハ衣シヤウニ不依働次第也

武德大成
酒井忠次水野忠重松平家忠松井忠次小笠原長忠並東三河

ノ士備ヲ成ス朝倉淺井ニ姉川ヲヘタテ、野村三田村ニ備
ヲ成ス戦初ランントセシ所ニ朝倉カ兵百騎計リ備ヲ離レテ
横鎗ヲ入ント見ヘケレハ本多平八郎忠勝廿三歳其機ヲ見
テ　神君ヘ申上ケルハ先是ヲ追散シ候ハント伺ケレ
ハ　神君尤ト仰アル忠勝急ニ馳向テ百騎計ノ敵ヲ即
時ニ追崩ス大久保治部大輔忠隣安藤彦四郎直次（帯刀ト 十七歳）浅井
カ兵ノ大寄山ヨリ數十騎馳下ルヲ見テ馳向ヒ戦テ首級ヲ
得タリ先陣並次ノ備ト攻戦フ

柏崎物語

門奈左近右衛門川端の境を見渡して二町計渡る所に合せて是又朱傘の
縫冊十八枚付たるを見て信長請て其身へ門奈ハ横に渡し之尺計也
拋取申る織田の前を通るの之驚れとも尤へさる由見え候申ゆり

勇士一言集

端本能可考事ニや江州姉川にて浅井両旗の長政朝倉
孫三郎と信長公　家康公御一所に御合戦の時
家康公御幕下小笠原与八郎門渡辺金太夫境の上にて鑓を合せ
たる朱傘をさし持たれハ一人同し所にたりける信長公御覧有て金太夫
御召の御無を下され宗の御得を御感状并御感状の文ハ天下
一番鑓と被下されたる故に其故なし侍之金太夫より先に鑓を
合せたる者も中山是非の物語なる門奈右衛門又ハ清伊達六太清林平六之

拙者なと此比ハ下にての事故既に信長公ハ見え不及故御人にまかり
今まて又一人も此陣に御座候林平六なとを引取陀寺にて一日に
六度ほと一番槍せし者なり

柏崎物語

浦出一二追之ぬ三番目石川伯耆守まて数十一度槍を入る御旗
元も候ける

大塚甚三郎敵と槍を合せ槍を突ぬ敵は槍を引取ニて槍ニて
敵を討ぬ是を御覧なされ抱ぬ又甚御働を仕る事ニ又内〳〵と於本
是より大塚又内と申

武徳大成

内藤甚一郎正貞鎗ヲ敵陣ノ中ニ落シケルカ馬ヲ引返シ敵
ノ中ヘ入テ鎗ヲ取テ皈ル掛リケル所ニ刺東ノ方信長ノ先
陣浅井カ勢ニ突立ラレ信長ノ先陣危ク見エケレハ
神君御馬ノ上ヨリ鎗ヲ御手ニ突賜ヒ歯カミヲメ懸レヽト
頻リニ御下知有ケレハ本多平八郎忠勝真先ニ進ミ松井忠
次モ續ヒテ攻戦フ敵ノ射ケル矢忠次カ左リノ手ヲ鞍ヘ射
付ラレ其矢ヲ抜テ即射返シテ敵ヲ射殺ス松平家忠歳十六
敵ノ陣中ヘ馳入戦フ敵ノ先陣八千余騎魚住龍門寺ヲ先ト
メ防キ戦フ御旗本近ク敵進ミケレハ御近習ノ士皆防キ戦
フ大久保新八郎康忠小栗庄次郎忠政

柏崎物語
小栗大次郎十六歳初陣一番鎗一番首を名法國にて鎗を弥ト
付大次郎は軍法度一番小鎗を入少自又一かしら弥小栗又一と申也

武徳大成
鷹見新八郎十五歳大久保喜六郎忠豊同与一郎忠益服部市郎右衛門保英十六歳等首級ヲ得タリ芝山彦十郎小川三十郎等ハ討死ス

柏崎物語
二番小渡部市郎右衛門保秀二番小松平甚右衛門榊原隼之助
大久保権十郎之弟権十郎頭に鎗を取働く花を仕ると云
弥今於國扇を取て先大久保花と働之今小花物今於国扇なり
渥美太郎兵衛頭に来をと取大久保次右衛門ハ宗旦と大に働く

武徳大成
大久保忠隣安藤直次モ首級ヲ得タリ　神君モ御下知シ玉フテ杖ニ突セ玉フ御鎗ノ柄ハ血烟ニテ滲リケルトソ
未勝負モ決シ難ケレハ　神君御覧アツテ榊原康政本多廣孝ニ仰付ラレケルハ我麾下ノ人数ヲ以横鎗ヲ入ヘシト有ケレハ康政進ンテ四方ヲ見ルニ前ニ水田アリ底ハ皆沙石ニメ深カラサリケレハ康政馬ヲ乗入テ駈タリケルヲ廣孝等ノ諸士先ヲ争ヒ驅進ム康政強ク戦ヒ疵ヲ蒙ル廣孝カ子彦次郎康豊敵ノ首ヲ取リ疵ヲ蒙ル康政カ家士中嶌右衛門佐討死ス渡辺半藏守綱本多三弥正重水野太郎作等鎗

ヲ合ス安部四郎兵衛傍ヨリ矢ヲ放ツ越前ノ兵衆ニトイヘ
ﾄﾓ前後ヨリ強クカケ立ラレテ敗軍ス

柏崎物語
軍半ハ横を入よとの上意ニ本多豊後榊原小平太ニ横を入よ依
て御前ハ豊後ハ田の中より入の候を不知して行小平太ハ知て
居る処へ水田の中をさけ左の方横を入浅井方崩る豊後小平太
先手とも一度ニ如くつくる処へ浅井惣崩れ豊後家来
討死する者なり
朝倉方之柄十所右之内西浦三人之内浅野左方を以て味方難
御座と切出る左方新へ出る者多し左の方残る又の備不残前

乱れ社ニ大勢の由し敵向坂一統是へ来る向坂式部兄弟を
以て向ひ合戦有所ニ打すへしと申所へ向坂五郎次郎来り其柄ニ
右方を横ニ掛候を刀を以て打折られ向坂六郎五郎家来之内ひとを
其二ツニ打落る二所式部ニ掛る處を六郎五郎打て実ニ面見
其柄ニ子十郎三郎来て返し合人二す打刀ニて働く其木に立つ
討取候

武徳大成
其外前場新八郎弟新九郎小林瑞周軒魚住龍門寺黒坂備中
守等ノ諸将皆踏止ツテ戦ヒ死ス新九郎ヲハ高力清長討取

柏崎物語
御旗本御人数を以て敵を崩し小追討御側御人数多く御開発

中ゝ頭合せ者兩人御側に在て是を御覧して政成かくこそ有と
御刀を御抜き政成か家へ大野三郎兵衛か後藤左馬助兩人を
討れる

武徳大成

其血散リテ御刀ヘモツヽキタル程ナリ朝倉カ兵悉ク敗軍
久松平勘四郎信一同与市忠政同源七郎康忠同左近真乗内
藤三左衛門信成同四郎左衛門尉正成菅沼山城守定政大久
保三郎右衛門忠政加藤勘右衛門正次都築惣左衛門秀綱天
野彦右衛門忠次成瀬藤蔵正義同弟一齋榊原隼之助忠政横
地造酒之助正家森川金右衛門氏俊青山虎之助長利野々山
藤兵衛元政山本忠兵衛正義杉浦弥市郎親次坂部又十郎正
家丹羽四郎左衛門松下惣左衛門大河内善兵衛飯嶋才蔵本
多忠勝カ徒士三浦竹藏櫻井庄之助

續開談

藤原定家の後胤下冷泉持為の支流弾正正忠勝家の別 櫻井小
右衛門として家号を櫻井と改む 長享元年月十七日五十二歳にて
卒す其子庄之助勝長 後改又右衛門 同国二連木に住し 明應六年九月
十八日卒す 勝長の嫡男左衛門光次と云 享禄二年正月二日卒す
二男又三郎長正と云 光次の子又左衛門勝光 同国宇都山に住す 其子
庄之助勝次 二連木にて出生し 宇都山に住居し武名を參有

権現様岡崎へ入らせ後濱松より本多平八郎忠勝小隊をさせ
らる是は忠勝若年小身なれとも良将故御先手の御備なる
猪次を初め浪人をうち附属させられ候也姉川合戦り
猪次余を合せて

武徳大成

原田弥之助木村三七渡辺半兵衛菅沼新八定盈カ家士今泉
四郎兵衛延傳（定盈ハ病氣ユヘ二出軍セス延傳ヲ使トシテ酒井忠次ニ屬セシム）等鎗ヲ合セ矢ヲ放テ
首級ヲ得タリ太田甚四郎吉勝一日ニ敵ト戦フコト五度首
五ツヲ得タリ渥美太郎兵衛友元ハ麾ヲ手ニ持タル敵ヲ組
伏セ首ヲ取ル小笠原新九郎同善三郎貞慶同左衛門重廣同

彦七郎貞頼四人都合二千ノ人數ニテ拒キ戦ヒ敵數多討取
左衛門佐カ手ヘ谷熊助同鹿助ヲ討取ル彦七郎カ家人渡辺
金太夫時ニ戦功アリサテ東方ニハ淺井カ先陣磯野丹波守
秀昌進ンテ高宮三河守大宇大和守山崎源太左衛門赤田信
濃守蓮臺寺等八千余騎ヲ従ヘ信長カ先陣坂井右近政尚カ
二千余騎ニテ姉川ノ川端ニ進ミケルヲ磯野等川ヲ渉テ攻
戦ヒ坂井カ一族百余人残ラス討死ス右近カ男久藏十六ニ
テ力戦〆死ス池田勝三郎續テ懸リケレトモ疵ヲ蒙リ引退
ク次ニ木下藤吉攻戦フ礒野等急ニ戦ヒケレハ引退ク逃ル

兵ヲ追テ信長ノ旗本マテ進ミ来リシヲ信長是ヲ見テ氏家
ト全安藤伊賀守三千余騎ニテ防カシム
勇士一言集
姉川合戦に於て坂井右近池田勝三郎先鋒に定らるへしとて
勝三郎抗論しけり　家康の御内酒井左衛門尉申して兎角
評議ハ何れ成とも御陣に有度しとて　家康の仰に従しく
調りたり　翌坂井右近池田勝三郎先鋒にそ定られ　川岸を
支へて備へしところ浅井備前守長政先鋒磯野丹波守
余騎にて川を越一文字に突かゝりけれは酒井右近敗軍して
為りかゝるさ而てより右近子息討死すへし坂井一門百
十三人討死したり池田か備も危く見へしところに池田勝三郎
旗本をいさめ先敵へ進ミ戦ける所に酒井左衛門尉も勝三郎も押並ん
て敵へ突かゝりけれハ敵陣大に敗れ味方も見へさりける處へ
酒井左衛門尉揮たれける長刀に於て先鋒味方勝利し池田か股に
当りたれハ後に無疵と左衛門尉申しけると云し　磯野酒井を
池田とも云ふ情を取て網に為りける敵振返てとて云ふ也へは討一戦
家康の御働にて信長の危きは治り給ひしとかや
武徳大成
稲葉伊豫守一鉄父子兵ヲ張テ　神君後陣ニ扣ヘケル
カ信長ノ本陣危キヲ見テ兵ヲ出シテ淺井カ人數ノ横ヨリ

突カヽル　神君御鎗ヲ振下知シ玉ヒテ信長ノ本陣ヲ
救ヒ玉フ浅井カ軍士終日ノ戦ヒニ疲レ矢種モ尽テ朝倉カ
兵ノ敗軍シケルヲ見テ士卒ノ勢モ衰ヘケレハ大ニ破レテ
引退ク

柏崎物語

水野右衛門組御手之阿部四郎兵衛並渡辺左衛次郎ト云者を
須渡辺半蔵ト云者すゝ渡して追討する者追付候て追ノ
今日左右田喜四郎ト名乗渡辺を入テ首をとれこゝ天神の兄弟ト云名
まうこゝ天神小笠原与八郎ニ鉾くゝ来るに之小笠原穀三郎
同左馬助胡金方佐て討死信長も此時ハ軍究中度ハせいし

一番合戦之中野右兵衛浅井方磯野丹波一の陣出て随々これしく
追崩し信長先手酒井右近人数を川掛二三段追崩されし
本の下も追崩され信長旗本をもつて討附　権現様御後
伝小稲葉伊豫居候為此様二而思ひ居処稲葉利右衛門居候
信長本陣崩へかゝり見ゆる　権現様は胡金を防崩し
其後信長をふ残して思召長沢首を見せ小笠原功者也へ走り
見ニ来り信長本陣崩し取見への御出其後可被成上候
後し西ニ横ハ防こそ其後稲葉伊豫ニ横筋遠り川を
渡し見て信長後ニ扣へ候て氏家常陸介稲葉伊豫ハ川筋

後しさる勢なりけれハ浅井殺しくさる哉　権現様御方

よりも追ちらしけれ

落穂集

家康公にハ一鉄を御使としさされ我等ハ前の浅敵を切崩し

候とて其まゝ東方ハ一戦差をは相手も有之前も東向ひに成ハ

北方先手ハ難儀にも御座候と御越并御先手衆ハ北方へも

御使をさされ御旗本ハ後を東方に向ひ有て御馬を寄させ

御先手ハ北向して今朝より胄をわかせ候ての先追添へ備え

之囲め体にて候ハ立てに御出被一鉄か勢と同して御旗

本乃勢をもつて横合より御見をよりしかと立させられ候

武徳大成

浅井カ家士遠藤喜右衛門ト云ケル者内々ニ云様ハ浅井方若敗軍セハ我ハ信長ト差違ント罵リケルカ其詞ヲ變セス浅井カ敗軍ヲ見テ首一ツヲ提テ信長ノ旗本ヘ馳ケルヲ竹中久作怪ミ見レハ遠藤ナリケル故ニ竹中則戦テ遠藤カ首ヲ取ル信長カ兵勝ニ乗テ大寄山虎御前山田河ノ辺迄敵ヲ追行ヲ信長見テ人ヲ遣シ是ヲ制セラレ小谷ハ四方険阻ナリ若敵ニ討ラレハ利ヲ失ン早ク引取レト下知セラレテ各引退ク

柏崎物語

磯野丹波守究竟不相叶ゆへ　権現様へ稲葉伊豫守

其間を無記小丹波守居城沢山へ帰る浅井も小谷へ引取る
其間に田村辺にて大かた討死する朝倉も越前へ引取る

其翌日廿八日浅井備前守は二千の人数にて先に備る佐和山の城を
磯野丹波守秀昌と云大剛の武者前後左右を下知して突懸る信長公は
先手酒井右近一番に崩れし味方は備へ崩れ立る中村流備々
めく処に浅井旗本は加勢一度に上川を越る信長は二万余の人数
なれとも二千の敵に突立られ十町余も敗軍す右の池田紀伊守も
先手は備る処に大に崩れ　家康公御先手酒井左衛門尉
備へ紀伊守馬を入て討とらんとするを左衛門尉見て此旗
康公は旗本も引具して御先へ自身蒐給ひて追崩して長刀持
助く其時姉川を渡り追討にして紀伊守か旗馬せしを
左衛門尉に相渡され此より大に御称美有しなり

諸將皆信長ノ陣所ヘ集リケレハ皆々軍功ヲ賞セラル信長自ラ打蚫ヲ取リテ先　神君ニ賜ヒテ申サレケルハ今日ノ大功言ニ述ヘカラス前代ニモ不及聞御手柄後世ニモ有ヘカラス漢ノ高祖ノ臣張良カ功アリ臣同日ニ語ヘカラス當家ノ紀綱武門ノ棟梁也迚品々ノ褒美ノ詞ヲ記サレ感狀ニ長光ノ刀ヲ添テ　神君ヘ進セラル　此長光ノ刀ハ三好カ刀ニテ光源院ノ御物ナリシヲ

信長ノ手ニ入後ニ長篠ノ
功ニ因テ奥平信昌ニ賜フ

神君モ深ク御禮有人々モ皆其功ヲ感
仰シケル
感狀記
此合戰ニ信長ハ三万計ノ大軍十三段ニ備ヘタルヲ長政四
五千ノ小勢ヲ以切崩シ信長ノ旗本近追詰タリ義景一万余
ニテ扣ヘタル處ニ　源君自精兵五千ヲ卒シ是ヲ撃
源君ノ先手ト互ニ挑ミ戰フ信長ノ惣軍敗レ走ル時長澤藤
藏斥候ニ往テ敵ノ虚ヲ見ル馳皈テカクト申セハ
源君則先手ノ勝負ニモ目ヲカケス二陣三陣ノ間ヲ絶義景
ノ兵稟崩レテ追討ニアヘリ長澤カ敵ノ虚ヲ見タルトハ義
景味方ノ勝ヲ見テ先手力戰スレ𪜈後ヲ推詰ス備間遠ニナ
リテ驕形怠氣アリ長澤是ヲ見ル　源君直ニ二三ノ間
ニ蒐テ大勝有後將此ヲ以警戒トスヘシ此時信長感狀ヲ
源君ニ與ヘラル其文ニ曰
今度於江北抜萃之功無十樊噲百張良不可同日而語也誠
當家之紀綱武門之棟梁者也
落穗集
姉川の一戰の戰場所柄の戰ぶりかくれなく日本國中へ聞へ
後世天下の武士のすさみとも成也　家康公の御武勇は
譽を萬年にのこし

柏崎物語

信長　権現様へ申され申しけるは大敵若仮名長光の御腰
の物をこれ之信長をまた見れ候にしめし候ハ持来り感状共被下
徳川左京大夫殿信長と被申候
安養寺三郎左衛門をとらへ申され浅井と縁者の事ゆへ存し先陣の軍より
不分敵陣に而此段と申さる由被下候御内へ旅に来り小谷を責てと
にて申安養寺三郎人数多し急に落城させ申しと申止めく
候ける六月廿八日姉川軍勝全　権現様御見候さ被信長
無恙勝利之　権現様遊ふ御内被召候信長を追て候ける

續開談

姉川合戦於御旗原年助太夫首一級を取て上覧に入附於御馬
添於人之年助の度上りし上意に付渡の七ケ所に取りさ
言上しても取沢に治する事に及べなく候て附前
誰の功を励りぬし候得共御感ぜられ候しても御陣の後をも
渡名於内七十貫文に下し附に廿九歳之

武徳大成

神君ハ三河ニ皈リ玉ヒ信長ハ京ヘ行テ将軍家ヘ拜禮アリ
テ摂津國ヘ行テ野田福嶌ノ畝ヲ攻ラレケル初メ姉川御出
陣ノ時三河勢御跡ヨリ参リケル者𪜈近江美濃ノ間ニテ一
揆ノ蜂起スルニ逢テ難義ニ及ヒケルニ天野孫七郎其勢ノ
内ニ有ケル力殊ニ防キ戦ヒ討死シケル夫ニテ一揆モ退キ

ケレハ三河勢無恙シテ通リケル　神君御皈陣ノ時孫
七郎カ父入道中風ニテ出陣ハセサリケルカ出迎奉ル御皈
陣ヲ拜シケル　神君孫七郎カ功ヲ褒メ給フトナリ
同年秋八月遠州三州風雨烈シク民家多ク破レケル廿八日
神君濱松ニヲハシマシケルカ觀世宗雪其子左近兩人ヲ召
シ御能有御一族並諸士其外三州遠州兩國ノ郷民ヲ召テ終
日見物セシメ大ニ饗應セラル御嫡子　信康君十三ニナラ
セ玉ヒ元服シ　岡嵜二郎三郎ト申奉ル此御祝トテ又御能
アリ九月大坂ノ本願寺僧光佐浅井朝倉ト組シテ信長ヲ攻

シトハカル夫ニ因テ義景長政三万余騎ノ兵ヲ合セテ江州
坂本ニ陣ヲ張ル佐々木入道義禎モ此トモカラニ同シテ野
洲郡ニ軍ヲ出ス叡山ノ僧徒モ一味セリ
武功實録
大坂門跡籠城ノ時九鬼大舩ヲ以テ所々ニテ勝利ヲ得タリ
泉州谷ノ輪ノ關ニテ一戰ニ利ヲ得タリ大坂ヘ乘廻リ尼カ
崎ニテ中國西国ノ兵粮舟ヲ留テ利ヲ得タリ堺浦ニテ日本
丸ヲ信長公上覧ノ時福嶋ニテ七千石ノ加増拜領イタサル
本高ハ三万五千石也九鬼舟軍ニ九度勝利一度ハ敗軍ノヨ
シ也

家忠日記

十九日信長ノ臣森三左衛門尉可成守佐山ノ城ヨリ兵ヲ発
メ浅倉朝井ト迎ヒ戦ヒ森遂ニ戦死ス
廿日義景長政守佐山ノ城ヲ攻テ大津近辺ニ放火ス
廿一日義景長政燧ヲ醍醐山科辺ニ挙ル于時信長ハ摂州ニ
陣メ野田福嶋ノ城ヲ攻ム
廿三日信長坂本ノ乱ヲ聞テ摂州ノ軍ヲ止テ義昭ト共ニ皈
陣ス

武徳大成

諸将ニ命シ叡山ヲ囲マシム又援兵ヲ濱松ヘ乞ケレハ
神君則酒井左衛門尉忠次石川日向守家成松井左近忠次松
平主殿助伊忠本多豊後守廣孝等ヲ大将トメ二千余騎江州
ヘ向ハシメ佐々木義禎ト日々合戦アリ

老人雑話

信玄方より叡山を語らひて信長を責来むとせし人也後に為にかし
かりけんと敵方と一味し攻亡しけるを後安堵せしめんとにや
叡山不慧の人多く語らひて謀反まて叡山より人数をおこさり
よりて京北白川へ町人を差遣してやかしむ今は東洞院
東側を焼之今出川口と今の所より西をは信長陣をとりて
少しも残さす上京をし諸城へ遣はせて智恩院へ陣をとれ
在々ところを焼払ひけるに京の内小西条より自焼をして京北

町ハ二条より上ハ大かた焼たり町人共も走り落て覆宗
高尾中々さらに不及妻子をともなひ引越して隠れけるに
京の城もあるゝ城に籠せりかくて居たりしに又扱ひになりて
宇治の槇の小城に行て居せり又軍起りて信長起りけ
攻落され公方ハ西国に行て毛利を頼み隠れ居せり此時に
信長岐阜におりし時ハ未安土の城なし越前の朝倉を責て
一門討滅し柴田を越前にすへ置て後ハ東西は信長の手に八
大坂の城に本願寺門跡（今の北又なり）籠居り西方の働に障しか
若干の年に及度々大坂寺方の人々と且方多く又ハ

紀伊の雑賀多くて相越なるゆへに度々加勢し落されせざり
けり然扱ひに籠城を渡さんと申されしに又門跡（今北又也）捨子
同心せられ父子も不和になり一年許て籠居り父紀州に居るゆへ
紀州の加勢来らず支ゆへ一年ばかりありて又扱ひに籠城を
渡させり依　東照宮は浜松におりし時は信長方か
度々攻寄られ難儀せしを信長ちくいより別條
なし駿府にて完山とりに大名居せり　東照宮ハ小
信長に属して
勇一言集
門跡度々合戦に先日井境にて信長と此門徒門徒分一揆

合せてより給ひても由有て追行ハ時小荒田又左衛門をうけ
足軽しより内蔵助に添て方様へと計りてはかやうに
おくを渡しまちのとしひ仰られ内蔵助と鑓を合せ右ハ
紀伊国田中左近右衛門といふ者也本の如くいふ所は此仰之旨内蔵助
是一番鑓を合せられても一番にならす荒田又左衛門にて
鑓にかゝり

権現様信長江別へ出向ひ玉ふ中にも此の国は三好一族将軍を
可攻落とて先京に浅路は浅織安宅甚左衛門先に出る
権現様御信長へ何ゆへか御役なく京にて事なし信長七月末まて
有之ハ奈良に一揆起りし先是を攻破りて京都へ至
将軍も依之て前義昭将軍を奈良へ入浅井を無理能
幸られて京都を可取とて朝倉へ申遣しけれは朝倉二万
余浅井同じく人数是を二十万石程有之間叡山に着陣して日セウ
上人の扱ひられとも出入無之所ゆへ信長を恨む信し浅井朝倉
と一同に此時より山法師まて一人も残らず引けて朝倉討
て出るを悦ひ朝倉の人数を叡山へ引入る 闕 月十日 闕 城を二
万程人数にて攻る處に三左衛門も切りて出る能すれとも
小勢ゆへ終に討破られ三左衛門太事之城を能守り討死

すること也大敵を引請追川まで川つゞき合戦に大功あれ
隠れ討死する織田九郎を同しく出て働く殊前の大ヨウ
シト出合首をとられ共を打返し討死する者なし信長も大事
なれとも免れしかは今万国も取るゝ矣岩所ハ三好と中島
先へ使をさし敵原事を退陣をと引取度由作平兄遣し
かりは猶かくし敵之越小口を塞め居る矣然れ共三好と中
島度ゆへ信長を可敵事も可有も知まてし後迄も
まを下く給ふる事侍れ意地之処所して引取ハへとも
十月夜中に引取る矣然れ共不捨ゆへ三好も不知訳出て申しまと

ヤ内謝にて引取る将軍は信して京都へ帰らる柴田を
月将軍を京都へ送り信長を近江へは前京都にて将軍
信長は両度安堵せる近江にて内不〳〵に然〳〵月度〳〵へも
然〳〵月ちり取る人数おし浅井朝倉叡山に居る大勢あれ
英〳〵しる京記にて度々ありも遠るしかまを度来る所れる山に
而〳〵の山五十町二十町の抜山を甚不要害にして元度前なる
信長も難しく度き事ゆへ可差抜るし御叡大師以来女人
牛馬懐剝北れたるしめる本浅井朝倉か陣所になれとも
魚肉を喰ひ女をもちいる事を破ひ乱して居る也此後も一々ゐ

飲喰致し居ける之信長も此段やかて従ひ居ける朝倉又人数
御一二千余に城之内一揆をこしらえ是ハ信長ヲ中にて打殺さんとて
信長朝倉へ使を立加様にたくみ可居様なし軍を可致と申送
らる然を朝倉承引せす我ら名誉之大名也朝倉浅井志かく
挨拶も成へく信長ハくて自然と候へし但ゆへ之松井左近か返事を
加藤ニ　権現様より此時将軍ハ御所之信長ハ将軍へ
内證にて
禁裏之内参有て将軍へ勅使ありて旧例騒乱万民へ
む和睦いたし候やう勅使なり信長も私之畏りて浅井

朝倉合点致さて御しくんにて御返ていかにとの由返答ハ者共家へ勅使
中渡畏りて信長陣払ひいさはのりしと云ふを返信長へ申
来る畏りけれ其中十二月十四日人数払ひる十二日浅井朝倉引て
帰る十七日信長岐阜へ帰る　権現様にも人数も引

續聞談

十月十日松永弾正忠をは城中にて討死す信長も自切して
夏はしめに後々之子右衛門を本願寺に従居申して補ける浪士ある
荒木種風雅なる人誹諧なる宗匠として後に入永貞徳といふ

感状記

松永弾正少弼久秀ハ三好修理大夫長慶ニ仕ヘテ右筆ヨリ
経上リテ家老トナル信長久秀ト入魂ス或時信長久秀ニ對

シテ貴殿ハ智将勇士也然レ𪜈一ツノ疵有ト云久秀請問𪜈
信長云王ハス久秀問ヿ頻リナリサラハ人ナキ所ニテ云ン
トテ人ヲ退ケ貴殿大身ニナルノ道ニ昧シト云是ヨリ久秀
異心ヲサシハサミテ遂ニ三好家ヲ滅セリ

老人雑話

松永霜臺ハ三好か臣也（修理大夫乳父なり）二人元とは不和之後信長に属し
それより信長美濃尾張より京都へ打上りて誅暴なりけれは終に我身
安からんと思ひけるや大和志貴毘沙門堂に城を構へ謀反して
時附の村并に城へ助成を出し城中へ人数おこりけれは大坂辺へ加
勢を乞に出したる使を捕へて城中より案内を能知せ来せしとて
兵をくり門を開かせて押入ける時に城を落す霜臺ハ秘蔵の
茶入平蜘蛛と云釜を打砕きて後自害して子をハ法華の
大坂の方へ落しけれとも訴へ出して雑兵に殺さる人質の子を
捨て謀反して信長の方に在し庶子之生松と云霜臺にひて後
車にて大路を渡し六条河原にて誅す年十二歳之（生ハ人にて同年なりしとそ）
松永霜臺籠城の時信長討手に秀吉をむかはせ条書を以て進して
云自分の側を破りて自害の首をうつし秘事の我等か手にかけんと
り秀吉は曰く様にせよとて信長我をいかさしおきなるへしすハ承
知んと云ふに自殺ありし去程に打破る首を宿に入て信長へ

此は信長公望なりし釜を首にかけても我前へ来る者に

渡は筑前上京にて此事をきゝ名をたすけたりとして

給り釜を我か首に結つけて鉄炮は薬に火を見付自ら

焼死す

勇士一言集

老たる人は語り伝りし松永弾正は三好左京大夫を害し

して大和国へ取返り候し欲心飽まで深く民百姓を貪るの

み事とし家中に出て入酒樽をとし世々高く悦し柳樽と名付

あるべし又を為して壊は雲ひの様し又串様は茶もたけ

長し然し世代々先々を継下地にせん為之折に似たる事によそへて

徳に似たる義用立て名根を茶まいりしに及びは何ほとの近も

たく又捨たる余りは肴にや札を立いたせりしは松永弾正か

分別を返し城中にたゝしねまとの所をは誰にても申来るへし又札

なりとも立添へし褒美を与へんと書たりけり或時札を立て

添より一言文に数年は万人民を貪りあまつさへ何も沢山に三人

あり但し松永家に事をかしこの運命之矢止之所にて候

庵し先をも誰をも貪りまし取あつめん所に別れる庵し松永

弾正度々無百姓し書そへたる云頃に信長公は柄に永禄十二年

十月十日は城自害し焼失ありける由中は人民義を喜びて

酒を賞て松永滅却は旗殊せしとかや武人語りけるは松永
弾正南部は多門に篭城せし時三好日向守下野守岩成主税助
大将として大佛殿に陣取て有けるを松永夜討して除
中村を討取て大佛殿を焼たりしも十月十日は夜の事なりし
となり此中村新兵衛と云ふ隠れ無き勇士にて数度の働しけれ
除中村と云しはこれなり

拍崎物語

十月十三日北條左京大夫氏康死去十六は初陣より理運に千
六ヶ度六十五歳也武道に達し英雄仁を専とし諸人の思ひ附
武田長尾は武勇ハありし共仁心なくて諸人の思ひ付ぬハ

明良洪範

中にも武田長尾を不及猶相模の氏政絶は

今川氏真永禄十二年遠州懸川ヲ遁出小田原ヲ頼ミ居給フ
處ニ信玄小田原ニ氏真ヲ置コトヲ以来六ヶ鋪被思追出之計
畧ヲシ玉フ其方便ニ甲州ヨリ小田原ヘ用所有テ原隼人ヲ
遣シ二度目ニ内藤修理ヲ可遣ニ定メ信玄計策ニ町人ヲ以
テ今度甲州ヨリ原隼人使ニ来リ其検使ニ内藤修理來テ氏
真ニ腹ヲ切ラセ申候沙汰ト言セラル氏真聞テ恐玉フ處ニ
沙汰不違原隼人來ルユヘ無心許被思處ニ重テ内藤來ルト
言ニ付サテハ疑フ處ナシトテ早々小田原ヲ舟ニテ退キ玉

フ悪風ニテ遠州濱松ノ下十連寺ヘ吹付ルコ、二十日計逗
留シ玉ヒ無詮方　家康公ヘ使者ヲモツテ被申入ハ伊
勢迄用事有テ参ル處ニ風悪ク候テ舟路モカナヒカタク候
間陸地ヲ参リ度候傳馬人足等被仰付被下候様ニト被申上
古ヘノ御好ミヲ思召安キヿノ由ニテ人馬以下ヲ被遣其上
ニテ暫ク御逗留有之様ニトテ色々御馳走被仰付内々無心
許氏真被思處ニ右ノ様子ニテ安堵シ玉ヒコ、ニテ寛々逗
留有其内信長ヘモ被仰遣ケレハ信長ヨリイツ迄モ留置玉
ヘ后々ハ駿府ヘ皈参ノ儀モ可有之ト念頃ニ被仰遣ニケリ

氏真モ悦ヒ逗留其後上方ヘ被参相國寺ニ居玉ヒテ公家衆
抔ト歌ノ會鞠ナトニテ樂ミ居玉フ鞠ノ場ヘ信長公來玉ヒ
見物其後振舞念頃ニテ長篠合戦ニモ同道勝頼滅亡ノ後信
長公ヘ　神君御約束ノ如ク駿府ヲ氏真ヘ被遣候得ト
被仰ケレハ始ノ約ト替リ用ニモ不立人可遣大國ヲ様無之
トカク無用ノ愚人腹ヲ可被爲切ト念リ玉フヲ氏真聞テ迯
出シ洛外ニ隠レ居シ玉フ處ニ信長公生害ト言ヒ告ル人有
ケレハ是ヲ偽ト思ヒ取タマサレマシキソ腹切トノ義ナラ
ハ尋常ニ腹ヲ切ラント被申誠愚将也

武徳大成
同年十月北條氏康卒ス其子氏政ハ武田信玄ト和睦シテ十二月信玄ヨリ氏政へ申遣シ今川氏真早川ニテ殺ント謀ル氏真是ヲ聞テ蜜ニ小舟ニ乗テ遠州ニ來リ　神君ヲ頼ル　神君旧好忘レ玉ハス其流落ヲ憐ミ玉ヒテ濵松ノ近所ニ居住セシメ懇ニ撫育シ玉フ駿河遠江ノ諸士是ヲ聞テ御慈悲成事ヲ悦ヒ弥皈服ス氏真元ヨリ越後ノ上杉謙信ト交ヲ通シケレハ　神君ヲ奉勧テ謙信へ言遣シテ神君ト交リアラシム是ヨリ越後ト濵松ト音問アリ謙信状ヲ石川日向守家成榊原小平太康政植村新六郎家政等ニ通シ甲州へ敵對ノ爲互ニ扱アリ

感状記
北條ト今川ト相謀テ遠州武州ノ鹽商人ヲ留テ甲斐信濃ニ鹽ヲ入ス是ヲ以信玄ノ兵ヲ困ントス謙信是ヲ聞テ領國ノ驛路ニ令メ鹽ヲ甲信ニ運ハシム我ハ兵ヲ以テ戰ヒヲ决シ鹽ヲ以テ敵ヲ窮セシムルヿヲセシト云送ラレケレハ信玄受ラレタリ是謙信ノ義ニメ且勇ナル處也ト云ヘ𪜈必遠慮深圖アラン信玄ハ謙信ヨリ先輩ニメ北條今川ノ地ヲ掠メ奪フ者ハマツ信玄也是故ニ信玄ヲ寇トスルヿ六國ノ秦ニ於ルカ如シ信玄モシ難厄ニ迫ラハ其次ハ必ス謙信ナラン

信玄諸牧ト戦テ兵久シク解スハ其間ニ北国ヲ一圓ニ討従
テ勢盛大ニナラハ東海ノ国々カヲ戮セ志ヲ一ニスルモ恐
ルニ足ラスト思惟セラレシナルヘシト云ヘリ

謙信越後ノ土物蝋燭金引鮭ノ鹽引黄蘗ナトノ商人ヲ作リ
テ国々ニヤリ人情地形ヲ伺シメ審ニ其ヿヲ問テ自記置テ
常ニ是ヲ見ルユヘニ其主ノ淑慝其将ノ能否ソノ國ノ虚實
其地ノ険易ソノ兵ノ多少百里二百里ノ外モ具ニ知スト云
ヿナシ近頃大和ノ郡山ノ城主本多内記政勝近習外様ヨリ
士二十人ヲヱラミテ金銀ヲ与ヘ商買虚無僧ナトニナシテ
日域六十余州ニ分遣シテ城地ノ山川土民ノ風俗ツフサニ
是ヲ見セシム

謙信二ノ宮ヲメ越後越中ノ辺塞ヲ守ラシム越中ノ神保謀
反ヲ企テ二宮内應セントス謙信是ヲ知ス越中ヲ攻撃ツ時
神保二宮謀ヲ合セ一陣二陣ヲ遣過メ挺兵三千余謙信ノ旗
元ニ直ニ衝テカヽル卒然ニ出タリケレハ士卒驚ク所ニ謙
信少シモサハカス自ラ再拝ヲ取テ猛威ヲ振ヒ士卒ヲハケ
マシ神保二宮ヲ手痛ク當テ無二無三ニ駈乱サレケレハ一
陣ハ遊軍トナリ二陣ハ後備トナル神保二宮塞ニ入ント引

取トコロヲ北ルヲ追テ付入ニシ即時ニ攻落サレタリ孫子ノ所謂常山ノ蛇中ヲ撃ハ首尾共ニ至ル者ナルヘシ或曰君ニ叛ク者其軍必固カラス士卒モ我主命ナレハ勢ニセマリ下知ニ従フト云氏義ハ人ノ本心タルニ因テ有マシキヿ也ト思ヒ實ニ心服セス是則敗形也如緩クセハ彼カ謀ナラン沮精ノ心未止サル先ニ強ク當レハ思ノ外ニモロキモノ也又日來謙信ノ勇悍奮疾倍々ノ人數ニテモ破リ難キヿヲ知テ彼カ従兵恐怖ヲ懐シ謙信ノ旗本皆精鋭ノ士ナレハ叛ク者ヲ悪ンテ殊ニ憤激リ闘聲常ヨリマサラン此虚實ノ理ヲ知カユヘニ謙信何ノ手モナク利ヲ得ラレタリ強ミ一篇ノ義ニアラス明智謀反ヲ発メ信長ヲハ討得タレ氏諸軍勢心服セス秀吉ニカキラス誰ニテモアレ義ヲ唱ヘ兵ヲ挙ハ必敗ルヘキノ虚アリト明智カ家禮後ニ人ト語リケル

謙信十二歳ヨリ諸国ニ巡遊スルヿ三年是故ニ地理ヲ知リ人情ヲ察ス十四歳ニメ越後ニ皈ル舎兄三郎懦弱ニメ爲景ノ仇ヲ報ルノ志ナシ越後ノ老臣是ヲ愁フ且謙信ノ勇ヲ慕ヒテ三郎十六歳ノ時隠居セシメテ謙信譲リヲ受玉フ姉ムコ正景シタカハス其勢七千ヲ以謙信ヲ攻囲ム謙信僅ニ

二千騎ニテ能是ヲ捍キ正景利アラス引テ皈ラントス宇佐美駿河守是ヲ見テ城門ヲ開キテ追討ントス謙信ノ曰未可ナラス宇佐美他事ハ君命ニ従ヒ奉ラン軍事ハ當意マツ老臣ニ任セラレ候ヘト云ケレハ謙信汝カ言ハ兵法ノ理ニ叶ヘシ然レトモ我若氣ナカラ思惟有我是ヲ討ノ時ヲ待レヨトテ七千ノ兵半計引立テ還シ戦フノ志ナキヲ見テ今コソ縦シ撃ヘキノ期ナレト云テ自ラ再拜ヲ振城ヨリタヽチニ突テ出テ正景ヲ追崩ス正景降ヲ乞テ謙信ノ先鋒トナル謙信越中ヲ攻ル時歟コレヲ拒クコトアタハスメ深ク入テ引テ皈ントス歟方々ヨリ出合テ撃テ越後ノ師ヲ敗ル謙信謂ラク信濃ニ出ル時ハ信玄ト云大將アリシメテ戦フヘシ越中ハ分国各將也ツヨク當リ疾戦フニ如シトテ又越中ヲ攻ム兵ヲ六手七手ニ分テ直ニ攻入テ斬畧ス向フ處寇ナシ遂ニ越中ニ克テ國士服従ス

私市ノ城ハ忍ノ成田カ弟小田助三郎コレヲ守ル謙信コレヲ囲ム二三ノ丸ハ本丸ニハナレテ長橋ヲカケタリ回輪ツヽカス相救ノ便ナシ泥淖ノ堅固ヲ恃ミタルハカリ也謙信巡見ノ時婦人ノ影ノ湟ノ水ニ移ルヲ見テ本丸ハ皆人質ナ

ルヿヲ曉ル於是夜半ニ火ヲ長竿ノ先ニ掛テ俄ニ本城ノ辺
所々ニ差上テ大ニ声ヲ發ノ刧ス婦女甚驚キ遽テ歒已ニ城
ニ入タリト思テ二ノ丸ニ走ル三ノ丸ノ守兵ハ二ノ丸ノ譟
動ヲ聞テ歒後ヨリ不意ニ攻入タリト思ヒテ二ノ丸ニ赴ク
謙信初ヨリ手當ヲ定置テ其虚ニ乘テ三ノ丸ヲ乘取ル其競
ヒニ二ノ丸ヲ急ニ攻テ昴時ニ是ヲ拔玉フ

上杉家ノ將士上野ノ辺塞ヲ攻ルヿアリ信玄後援タルニ藤
岡ノ下桂川折節霖雨ニテ大水漲レリ在家ヲ壞テ筏ヲ組渡
メ是ヲ誡ルニ逆テ久水ニヲシ流サル渡ラサレハ後援ノ甲
斐ナシ渡サントスレハ溺レ死ナンヿヲ危フム奈何セント
評議セラル丶所ニ川所ノ功者有ケルカ古ヨリ川ヲ渡スニ
小勢ハ沉没スレ𪜈大勢ハ沉没セスト申傳候宇治川両度ノ
例ソノ證據ニテ候昔ハ遠キヿ近キ頃賤臣度々渡リテ見候
ニ馬ハ馬ヲカニシ人ハ人ヲ便ニメ手ト手ヲ組鎗ト鎗ヲ取
大勢ノ競ヲ以テ御自身ノリ入ラレ摠軍一同ニワタサレハ
少シモ危カラシト申ニ付信玄聞受則下知メ渡サル丶ニ雜
兵小荷駄ニ至ルマテ難ナク渡リ得テ歒ヲ追拂ヒ身方ヲ極
レタリ

謙信戦ニ臨テ俄ニ人數ヲ分ント思フ時馬ヲ部隊ノ中ニ乗入八字十字ニ分ラルヽニ其馬ノ行ナリニ左右ニ分レテ自ラ又部隊ト成如シ鎗持アヤマリテ別部ニ紛レ入テソコニ在トハ相見レ𪜈主人モ来レト云事アタハス鎗持モ行ントスルヿアタハス太刀打ノ働ナリ其法ノ厳ナルコト此ノコトシ

武辺咄聞書

萩田主馬ハ小源信ニ小男ニて尤く足ニ氣性有て足く足り
ける大力ニ具足を着す思ニ本彦朋彼ニて鉄扶小ニ軍ニ差
を差ても一代采幣も団扇も一度取らしてハ不見ニ竹餞
三尺斗ニ切て枝ともハしらて束を持て小知をなり小梁の
華厳竹ぬ急をとぬ拿りけるとなり

武徳大成

是月廿八日甲州ヨリ秋山伯耆晴近東美濃岩村ヘ出張ス東三河ノ兵足助ノ鈴木越後守重直山家三方作手田嶺長篠ヨリ出テ戦フト云𪜈敗軍シテ退ク

武徳成業巻之七終

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan